



世界史から地域史へ、そして「日本史探究」へ

—安政東海地震と日露交流史に向き合う—

浜松市立高等学校 松井 秀明 (まつい・ひであき)



—使用教材—

『図説 日本史通覧』

1 頬を伝う涙はとめどなく

アメリカ人の膚の色に対する偏見の数々が、ここ英国にもきつとあるのではないかと。白人女性たちは、自分たちの膚より多少浅黒い私の膚の下にも血が流れているという理由で、私の看護上の申し出を受け入れるのが嫌なのだろうか。人影が急速にまばらになる通りに立ちつくしながら、とめどなく頬を流れ落ちる涙—悲しみの涙—を、愚かにもどうすることもできませんでした。私の動機を誰一人として信じてくれず、神でさえ、私が求める機会を与えてくれないという嘆きの涙でした。じっと、そこに立ちつくしていました。ロンドン上空にかかる黒い雲を見上げ、はるか彼方にも目をやりながら、声を上げて助けを求め、祈りました。

『メアリー・シーコール自伝 もう一人のナイチンゲールの闘い』
2017年、彩流社

上は「歴史総合」の授業「クリミア戦争」で扱った資料である。いくつかのスマールクエスチョンを交え、授業展開した—「なぜシーコールの人道的な申し出は英国政府に拒否された？ 彼女の涙の意味は？」「彼女はその志を諦めた？ 貫いた？」。ジャマイカ出身のメアリー＝シーコールは政府に看護・医療活動を申し出たが、拒否される。肌が浅黒いとの差別的な理由からだった。そこに彼女の涙の意味がある。

シーコールは白人の父、黒人の母を持つ。医療を生業にしていた母から、見よう見まねで医療・看護・投薬の知識・技術を身につけた。

彼女は自費で戦場に向かい、敵味方にかかわらず戦傷者を看護した。一方、フローレンス＝ナイチンゲールは、戦地から離れたところの病院（オスマン帝国下のスクタリ）で活動した（だからといって、彼女の功績が減じるわけではない）。くしくもこの戦争中に産声を上げた職業的な看護活動は、情熱的な二人の女性により、広く認められる。

そのような側面史を持つ「クリミア戦争」を、「日本史探究」に架橋したい。まず、生徒たちに問いかけてみる—「和親条約の締結国“英・米・蘭・露”のうち、アメリカ（1854年3月）の次を早い順に並べてみよう」。彼ら彼女らは並び替えが好きだが、なかなか正確に答え

られないだろう。

そこで『図説 日本史通覧』（以下、『通覧』）の巻末年表を開く。正解は英（1854年9月）→露（1855年2月）→蘭（1856年1月）である（ただし、年月日は『近代日本総合年表』*1による太陽暦。以下も太陽暦を使う）。

オランダを除き、条約締結の背後にあるのはクリミア戦争（1853年10月～56年3月）だ。イギリス・フランス・ロシアがこの戦争にかかりきりで、アメリカが日本開国の主導権を握ったことはよく知られる。

アメリカ同様、日本開国のチャンスを狙っていたロシアは1852年、ペリーと同様の海軍軍人プチャーチンを派遣。ペリーに遅れること1か月後、1853年8月に長崎に到着する。それにもかかわらず、イギリスにも先んじられるのはなぜか？

戦争がアジアにも波及したからだ。プチャーチンは、イギリス軍がカムチャツカ半島のロシア要塞を攻撃するとの情報を得て、いったん上海に退く。一方、ロシア艦隊を追い、長崎に入港したイギリス艦隊は、戦争を有利に進めるため、薪水・食料補給をむねとする和親条約締結に成功した。1854年8月には英仏軍によるカムチャツカ半島攻撃が始まる—クリミア戦争は、英・露のいわば「グレート・ゲーム」に関わるグローバルな戦争だった。

2 30分間に42回転

秘書官ゴンチャロフは、このころのプチャーチンの本音を記している—「私が日本にやってきた用件は戦争によって終わった」*2。しかし、プチャーチンはカムチャツカでの戦闘のさなか、旗艦「ディアナ号」で再来する。他国と異なり、国境確定という重大な使命を負っていたからだ。10月の下田入港後、一行（約500人）は本腰を入れ、条約交渉を始める。そこに二つ目の苦難がディアナ号を襲う。何が起こったのか？ 次の史料から探究してみよう。



写真 戸田造船郷土資料博物館（沼津市）に保存されているディアナ号の錨（筆者撮影）



図1 伊豆半島（□が戸田港）『新詳高等地図』p.126 ①関東地方



図2 戸田港 国土地理院、2011年撮影

もっとも凄絶だったのは、海岸がたえず高く見えたり、低く見えたりする変化であった。あるときは艦と水平になるかと思うと、すぐさま6サーゼン（約13メートル）も高く上った。甲板に立っていたのでは、水面が上るのやら、海底が動くのやら、てんで見当もつかなかった。艦は潮流のまにまに四方八方へ振り回され、近くの島（犬走島。下田湾の中央にそそり立っている岩島）の岸壁に接近して、あわや胡桃のように粉微塵かと脅されるや、たちまち湾の真中へ投げ出されるという始末であった。やがて、急激な回転が始まった—報告書の記録では30分間に何と42回転もしたのである！そしてついに干潮となり、艦は海底や自身の錨にぶつかって左右に大きく傾き始めた。そして最後に艦は傾斜したまま、しばらく動かなくなりました……

『ゴンチャロフ日本渡航記』終章、1969年、雄松堂書店

ロシア側をして、知性派と評価された幕府側の交渉相手（海岸防禦御用掛）川路聖謨は朝食中、地震に遭遇。津波を恐れ大安寺山（海拔9m）の中途まで登り、眼下の下田港を次のように記す。

火事かとみる間に、大荒浪田面へ押し来り、人家の崩れ、大船帆ばしらを立てながら、飛ぶが如くに田面へドッと来たる体、おそろしとも何とも申すべき体なし。（中略）絶頂へ参りみれば、手足をかき破りて、血の出ぬというものなし。ここには、女其外逃上りて、みな念仏を唱え、或は泣き居たり。

『長崎日記・下田日記』1968年、東洋文庫124、平凡社

和親条約の交渉中の二人が記した地震は何という地震だろう？『通覧』の「特集 自然災害と人々の営み」（p.338～339）を開くと、「安政東海地震」だと分かる。その隣に「安政南海地震」（両者ともM8.4）「32時間差で関東から九州に被害をもたらした」、前者は12月23日9時30分ごろ、後者は24日16時20分ごろに起こったプレート型の地震である。「安政東海地震」だけでも死者約1万人余、倒壊流失家屋は8300戸にのぼる*1。

翌年には「安政江戸地震」（M6.9）とある一開国直後の日本は、自然災害も加わり混乱を極めた。掲げた二葉の史料を読むだけでも、予測される「南海トラフ地震」「首都直下型地震」の教訓を拾えるかと思う。

下田港に停泊していたディアナ号は地震の津波で大き

く損傷。大洋の航海は不能になったが、幕府はプチャーチンの要請で急ぎ修復に取りかかる。ロシア側は下田以外の修復地を希望した。選ばれたのは戸田村。日本近海にいたイギリス・フランス艦隊の監視から逃れるためだ。戸田はなぜそうした条件に適していたのだろうか？地形から探究してみよう。

まず、伊豆半島の地図（図1）を見て、戸田の位置を確認し、空中写真（図2）で詳細な地形を確認する。身を隠すには、うってつけの地形だ。図2を見ると、三方が山に囲まれ、御浜崎が半島のように伸び、外海を遮断する、いわゆる「砂嘴」である。周りの山々からは、良質な天城材を産する。ゆえに、古来から船大工が多い。学習指導要領の目標（1）にいう—「（日本史探究は）地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解」<（ ）は筆者>されなければならない。

3 進水式はわずか5分間

ディアナ号は仮修理を経て1855年1月2日、下田港から戸田港まで、乗組員と共に直線距離で約50kmを曳航されることになった。しかし、目的地まであと少しのところ、嵐に遭い宮島村沖合（現、富士市宮島）まで流された。ディアナ号の漏水は止まず、翌日になっても強い風は収まる気配を見せない。

乗組員はカッターに乗り移り、逆巻く波を乗り越え上陸を目指した。このとき、ロシア人たちは「信じられぬ出来事」を目にする。乗組員マホフ司祭長は次のように書き留める。

私たちの運命を見守るべく、早朝から千人もの日本の男女が押しかけて来たのである。彼らは奇特にも東になって浜辺を走り回り、何やら気遣っているようであった。（中略）私たちがカッターを繰り出した意味をいち早く察して、激浪がカッターを岸へほうり出すに違いないと見て取り、綱に体を結び付けて身構



図3 『プチャーチン以下露国船来朝、戸田浦にて軍艦建造図巻』公益財団法人東洋文庫所蔵

えていた。そして、カッターが岸へ着くやいなやそれを捉え、潮の引く勢いで沖へ奪われぬように、しっかりと支えてくれたのだ！ 善良な、まことに善良な、博愛の心にみちた民衆よ！（中略）一五百人もの異国の民を救った功績は、まさしく日本人諸氏のものであることを！

『フレグート・ディアナ号航海誌—ワシリー・マホフ司祭長の1854—55年の日本旅行記』『ゴンチャロフ日本渡航記』1969年、雄松堂書店

ロシア人乗組員はこうして宮島村三軒屋浜に上陸を果す。しかし、1月7日猛烈な驟雨と荒波の中、ディアナ号は海の藻くずと消えた。

—この35年後、オスマン帝国のスルタン、アブデュルハミト2世が親善のため日本に派遣した、エルトゥールル号が紀州沖で沈没。500名ほどが亡くなったが、大島村（現・串本町）の漁師たちが69名を救助・看護することになる。二つの地域の博愛精神はむろんたたえられるが、これらの出来事は、国家という枠組みでなく、地域が直接世界に結び付くことをよく示している。

ディアナ号が沈没したため、戸田村ではそれに代わる帰国用の洋式船を建造することになった。当時、人口約3000の戸田村だが、地震のため家屋の4分の1が損傷、死者30人で被害も甚大だった。そこに、ロシア人約500が滞在することになった。

秘密裏に行われる洋式船建造のため、村の4か所の出入口には番所が設けられた。戸田村からは7人の造船御用掛（船大工）を中心に他村からも招集され、134名（延べ人数3659名）が携わり、ロシア人との共同作業となった。戸田村民とロシア人の交流は「貰うな。やるな。付き合うな」とされたが、交流は自然に生まれた。

下士官の宿所となった宝徳寺には、日露合作の草花の掛け軸が残る。グリゴリエフの絵に「70歳かう子」と村民女性の添え書きがある。

ロシア人の特徴と名前を付した記録も残る。先述のマホフ司祭長は「長髪僧の人」、後述する技術者のモジャイスキーは「モウザイ兄」、中国語通訳官ゴシケービッチは

「色白筋ナシ冠」（色白で筋のついていない、帽子をかぶっている）というように*3—再びマホフ司祭長の声を聞いてみよう。

彼らは客好きで善良である。オランダ人以外の外国人を入国させないという法を曲げてまで、私たちが愛想よく迎えて、住居を提供し生活に必要なものをすべて持って来てくれた。彼らは友情に厚く、同情心に富む。私たちの日本滞在中、私たちは誰一人として侮辱を受けなかったばかりではなく、いつも私たち一人一人に対しても好意と尊敬を示し、私たちが日本を去るときにも友情を示し、別れを惜しんでくれた。

『フレグート・ディアナ号航海誌—ワシリー・マホフ司祭長の1854—55年の日本旅行記』『ゴンチャロフ日本渡航記』1969年、雄松堂書店

初の洋式帆船建造はこうした空気の中で始まる。ロシア側の中心は、海軍士官で技術者のモジャイスキー。後に飛行機を発明し、広く知られるようになる。

昼夜にわたる作業の末、着工からおおよそ80日で船は完成。プチャーチンにより、「ヘダ号」と命名された。総長24.57m、幅7.02mで50人乗り、排水量は約80～100t。2本のマストを備えた船である。船底を「竜骨」で支える技術も、このとき学んだものだ。

1855年4月26日（安政2年3月10日）、ヘダ号の進水式が行われた。和船の進水式（船おろし）は1日ばかりであったが、ヘダ号はわずか5分であった。

3樽ほどの牛脂が塗られた木製レールを伝い、ヘダ号が海に滑り込むシーンを描いた「戸田浦にて軍艦建造図巻」を見つめたい（図3）。この絵を通して生徒たちからのつぶやきが起こり、多くの「問い」が生まれそうだ。教師が「最も印象に残る人はどの人？ これって何？ を挙げてみよう」と問いかけてもいい。

ロシアの要人には一人一人名前が書かれる。無論プチャーチンもいる（左から3番目）、帽子を回し、扇子を掲げ踊るロシア人たちの歓声が聞こえてきそうだ。それを取り巻く船大工や武士たちも笑みを浮かべるなど、進水式は終始温かい空気に包まれた。船にはロシア海軍旗（左）とプチャーチン提督の旗（右）も掲げられた。

なお、洋式帆船建造に携わった7人のうち石原藤蔵、堤藤吉、佐山太郎兵衛、渡辺金右衛門らは石川島造船所に招かれた。上田寅吉と鈴木七助は勝海舟らと共に長崎伝習所に派遣され、蒸気船の機械製造と操縦を学ぶ。上田は1870年、横須賀造船所の初代職長となるなど、日本の造船業の礎いしづなになった。

4 捕らわれの身で生まれた日露辞書

ヘダ号の進水式の前後、ロシア人たちは3陣に分かれて帰国する。1陣はアメリカ船に150余名、第2陣はヘダ号にプチャーチンら約50名が乗船、第3陣はドイツ船に280余名に分かれ、1855年3月～5月に無事帰国を果たす。

なお、第3陣に紛れ込み、ロシアに密航したのが脱藩掛川藩士橋耕齋である。耕齋はヘダ号建造中にヘダに潜入。ロシア側の中国語通訳官ゴシケービッチと親交を持ち、大きな櫃の中に入り乗船したという。しかし沿海州を航行中、敵国イギリス船に捕えられた。

その後、橋耕齋はゴシケービッチと共にロンドンで捕虜生活を送る。護送期間も含め、二人は初の本格的日露辞書『和魯通言比考』を編むことになる。収録語数は約1万6千。言葉はカタカナ、単語はイロハ順に並べられ、ロシア語が付される。『和魯通言比考』序文にゴシケービッチが次のように書いている。

わたしは捕虜として英国の軍艦に9ヵ月乗せられているあいだ、たっぷり閑暇にめぐまれ、それを何らかの仕事にあてなければならなかった。わたしの手もとには、日本の友人たちから贈物として与えられた若干の書籍があった。そのなかには小型の辞書が5冊ほど含まれていた。この日露辞書の基礎にえらんだのはそのうちの最善のものである。

中村喜和『おろしや盆踊唄考』1990年、現代企画室

その後、橋耕齋が作った日本語のテキストを基礎に辞書は編まれた—『和魯通言比考』は、クリミア戦争が生んだ文化的遺産といえる。耕齋37歳の時だ。

クリミア戦争が1856年3月に終わると、耕齋は首都サンクトペテルブルクに招かれ、通訳官として働く。1857年には、『和魯通言比考』が出版され、翌年ペテルブルク帝室アカデミーから賞が授与された。私生活では、ギリシア正教の洗礼を受けウラジミール・イオシビッチ・ヤマトフと名乗り、ロシア人と結婚。2人の子どもをもうけ、ロシアに帰化する。

耕齋は1862年・1866年・1873年の3回、日本からの使節を接待している。3回目の岩倉使節団は3月30日、ペテルスブルクに到着する。このとき岩倉具視

から帰国を強く勧められた(『大日本人辞書』)という。

翌年、耕齋は故国の土を踏み、増上寺境内に住んだ。辞書制作の功績によるロシアからの年金で生活し、再婚もする。一度だけ、政府の命を受け樺太に出向き日露交渉に当たったほかは、仏門に入り増田甲齋と称すなど静かな余生を送った。

帰国から12年目の1885年5月31日、橋耕齋は肺炎のため亡くなり、波乱の生涯を閉じる。65歳であった。ゴシケービッチとの共作『和魯通言比考』は日露双方だけでなく、ヨーロッパ日本研究者の間でも高く評価され、何より近代の日露交流に血を通わせた。

5 いのちの尊さに思いを馳せる

最後に、下田や戸田の地域から見つめた日露交流史をつづった拙文から、学習指導要領「日本史探究」の「時代を通観する問い」を試みる。『通覧』p.305の4の年表を開き、読んでみる。「本日学んだことを踏まえると今後、望ましい日露関係を実現するにはどのようなことが必要だろうか?」。

もう一つ例示する。再びp.338～339「特集 自然災害と人々の営み」の年表を開き、中世以降の「南海トラフ」のプレート型地震に○を付けてみる。1361年・1498年・1605年・1707年・1854年・1944年・1946年の地震が該当する—「どのくらいの周期で起きている?」「これらの年の、身近な地域での被害を調べてみよう。そこから学ぶ教訓は何?」。

例えば、1498年の明応東海地震について、年表には「浜名湖が外海とつながる」とある。この地震の様相については、駿河国庵原郡海長寺(現静岡市葵区)の僧日海が日記に書いている—「尋常ではない大浪(津波)が幾度も競うように襲来したため、海辺にある堂舎・仏閣・人宅・草木・牛馬・六畜等に至るまで悉く大浪に吞まれて死んでしまった。(中略)日圓聖人や同行した海上寺の衆僧、上行寺の僧侶以下は、悉く大浪に吞まれて流されてしまった。大浪は大地震の時に必ず起こる」※4。—自然災害史学習の肝は、教師と生徒たちが「山川草木、生きとし生けるもの全ての、いのちの尊さに思いを馳せる」学び合いでありたい。

(参考文献)

※1 岩波書店編集部編(2001)『近代日本総年表』岩波書店

※2 ゴンチャロフ著、高野明・島田陽記(1969)『ゴンチャロフ日本渡航記』雄松堂書店

※3 大南勝彦(1973)『ドキュメント ペテルブルグからの黒船』六興出版

※4 中條暁秀編(2024)『龍水山海長寺 日海記の世界』静岡新聞社